

平成30年度 第2回
「帯広市地域自立支援協議会 就労・社会活動部会 兼 基幹相談支援センター研修会」
を開催しました。

過日、平成30年11月30日、第2回 帯広市地域自立支援協議会 就労・社会活動部会を開催しました。この研修会は、関係機関の就労支援・生活支援・定着支援等の支援力の向上や関係機関との連携構築を目的に、平成28年度から帯広市と共同で開催しております。

今回の研修は、相談支援事業所や福祉サービス事業所、その他様々な関係機関が一堂に会し、全体で個別支援を考えられる場を企画したいと考え、初めて帯広市基幹相談支援センター研修会との共催で行いました。



研修の前段は、「いまさら聞けない計画相談支援と支給決定」と題し、帯広市保健福祉部障害福祉課より情報提供をいたしました。支給決定から見落としてはいけない注意事項、モニタリングの目的や頻度まで、改めて確認する事ができた内容でした。

後半のパネルディスカッションでは、株式会社 つながり 代表取締役 北村直也氏、株式会社 ちあふる 代表取締役 小関勝俊氏、相談支援センター3ねんBぐみ 代表取締役 桑原由美子氏、相談支援事業所帯広はちす園 係長 石田希氏、十勝障がい者総合相談支援センター 課長 笹山美香氏をパネリストに、十勝障がい者総合相談支援センター 所長 門屋充郎氏を助言者に迎え、「相談支援専門員と連携」について意見を交わしました。関係機関と連携を進めていく際の難しさやうまくいった経験、今後の連携に対する期待について話し合われました。

以下、パネルディスカッションの内容をお伝えします。

＜連携の中での失敗例・やりにくかった点＞

- ・その方の情報が最近のものしかなく、全体を把握するのに時間がかかってしまった。もともと幼少期から様々な人のかかわりがあったことがわかり、事前情報としてわかっていたら、もっと早い対応ができたと思った。ケアマネにも介入してもらいたかった。
- ・児童から成人のサービスに移行するとき、一度ケアマネが切れてしまった事で、連携できずに終わってしまった。必要であれば継続できたのだが…。
- ・個人情報取り扱いや、権利擁護についての重要性和、事業所毎の情報共有の範囲について、考える必要があると思った。
- ・暫定支給終了後や就職したタイミング等変化があったときに、具体的な支援の内容を伝えてくれなかった。打ち合わせのタイミングに節目節目で困っていた。
- ・居住地特例で帯広市の事業所に通っていた方の対応をした際、利用状況が安定していたため、モニタリングを6か月後にしたところ、対象者の都合で帯広市への引っ越しをしていたことを押さえきれなかったことがある。その際、事業所と連絡調整をすることが出来ていなかった。結果として報酬をどこに請求できるかわからなくなってしまった。
- ・計画相談が始まった平成23年頃、計画相談の仕組みを知らない事業所の中に入っていくことが多く、ケアマネ



の役割をわかって頂けなかったため、受け入れてもらえず連携できないことが多かった。

<連携の中でのうまくいった例・やりやすい点>

- ・福祉や相談の歴史を知らないからこそ、必要だと思い連携をたくさんしてしまっただけの結果として、ちょっとしたことの共有ができることで、いろいろな生活の把握につながり、崩れる前にキャッチできたり、いろいろな方からの協力をいただくことができた。
- ・連携していることでとにかく安心できる。対象者が福祉サービス事業所でうまくいかなかったときにケアマネがサポートしてくれ、前向きになってくれた。
- ・何かしらの変化があったときに、発信があるのがありがたい。そこで本人に会いに行けることにつながるし、そういった積み重ねが大切。

<良い連携とは・今後への期待>

- ・虐待が疑われる方の事例に対し、いろいろな機関が関わってくれ、親族が出来なかったことを各機関がチームでかわり、ご本人の成長などの変化が見られた。
- ・良い事例は現場で初めて生まれる。連携は課題だが、福祉サービスを利用することで、自分が稼いだお金で何かしらの喜びになったり、犯罪を防ぐことにつながった人もいる。月 1、もしくは定期的にケア会議を行い状況の確認をすることが必要。
- ・障がい福祉サービス担当者もケアマネ担当者も、お互いに困ったときに相談できるという強みを持てる。
- ・ふらっと気軽に行けたり、話ができる関係性が、利用者にもプラスの効果につながる。
- ・「着地点」を意識したかわり。着地点が一致しているうえで、別の視点から本人にかかわっていくことができる。
- ・自分一人で支えているわけではないという前提があり、同じ認識で本人の事をいろいろな人と見守ることができたら、ずっと連携していけると思う。
- ・思いを共有する事を大切に。意見が食い違うからダメではなく、その話し合いができることが自分の成長にもつながる。
- ・意見が合うからよというわけではない。時に、別の視点も含めて話ができることが良い連携になるのでは・・・。

<連携がうまくいくために必要なこと>

- ・モニタリングの頻度など基本はあるが、顔の見える関係づくりを大切にしているため、要請があれば対応するし、初心を忘れずに行きたい。
- ・根拠があれば、そのことに沿って対応していく必要があると考えている。
- ・電話、メールなどを使い、すぐに対応できなくても、利用者に安心できる状況を作っている。
- ・メールと電話を基本としている。手段はいろいろあってもよいが、個人情報の取り扱いだけは守っていきたい。
- ・本人を中心とした計画・事業所であるべき。



<まとめ>

障がい者総合支援法の中で計画相談の仕組みがスタートし、最初はおっともっとうまくいかないことが出てくると思っていたし、色々な不具合が出てきて良いと感じていた。全体の中で、制度も使うが制度以外の部分も考え、各々の立ち位置を理解しきれていないこともある。一人一人の思いがしっかり確認でき、本人中心となっていれば上手くいく。うまくいった経験をしながら積み重ねていくことが大切。制度の不具合を現場レベルで検証し、良い制度に育てていくことが何よりも大切と感じている。

規制緩和により、どんな法人も事業を起こすことができるようになったが、本人が中心で本人が決めていくことを大切にしたい。利用者は支援者を信頼して頼ってくれることを大切に、各々の個性があり、そこを認めることから連携が始まる。サビ管とケアマネは働く場が違っただけで同じ思いで働いてもらいたい。

制度が開始した時の成り立ちや、障がい者支援の在り方を知るとともに、それぞれの思いが共有できた時間だったと感じます。今後は、各々の役割のもと、より方策を具体化していく必要性があります。

自分たちの立場であれば当たり前のことも、立場が変わると理解されていないことや誤解をうけかねないことが関係機関の連携では起きてきます。ご本人の希望に沿った支援と一緒に考え実現させていくためにも、各々の役割の把握と支援の方向性の一致、その時々ケースに合わせた柔軟な対応が必要と改めて感じました。

思いを共有したうえで、それぞれの分野での対応スキルが問われます。今後は、我々の支援を見直しスキルを磨く研修につなげていきたいと考えております。次回は3月開催を予定しておりますので、皆様のご参加をお待ちしております。